

## つながり再発見！<sup>しゅんこうじ</sup>春光寺と松井家

八代<sup>ふるふもと</sup>古麓町にある春光寺は、延宝<sup>えんぼう</sup>5年(1677)に創建された臨済宗南禅寺<sup>りんざいしゅうなんぜんじ</sup>の末寺<sup>まつじ</sup>で、八代城主松井家<sup>ぼだいじ</sup>の菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>(先祖<sup>ついでんくよう</sup>の追善供養などを営む寺)として知られています。この展示では、春光寺に伝わる貴重な文化財の中から、お寺の歴史がうかがわれる絵画と古文書を展示し、松井家と春光寺との密接なつながりを紹介します。



春光寺は八代城主松井家<sup>ぼだいじ</sup>の菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>です。延宝5年(1677)、松井家4代目直之<sup>なおゆき</sup>が、先祖<sup>ついでんくよう</sup>を供養するために建てました。

私が春光寺を建てました。



4代目 松井直之



境内の裏山には、松井家歴代の墓所があります。

私の墓も春光寺にあります。



初代 松井康之



初代<sup>やすゆき</sup>康之・2代目<sup>おきな</sup>興長<sup>じゅんし</sup>に殉死した松井家臣のお墓です。康之に殉死した松井志摩守盛永<sup>まついしまのかみもりなが</sup>(作品5)のお墓もここにありす。



寛永 18 年(1641)

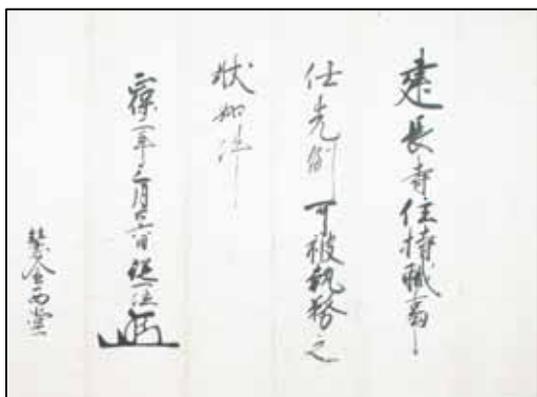
絹本着色・掛幅装

最嶽元良(南禅寺274世) 賛

春光寺所蔵

松井家初代康之<sup>やすゆき</sup>の妻、自得院<sup>じとくいん</sup>の肖像画です。自得院は元和 5 年(1619)幕府<sup>しやうにん</sup>の証人として江戸に赴き、寛永 18 年(1641)に病死しました。亡くなる前に残した自筆の手紙に、自分の身のまわりの世話をした人々に感謝の気持ちを表し、その人々の今後の生活を息子興長<sup>おきな</sup>に依頼しています。この肖像画からも、このような気丈で心遣いの細かい人柄<sup>うちかけ</sup>がうかがえ、打掛<sup>ぼだいじ</sup>も美しい模様に描かれています。自得院の墓は、松井家の菩提寺春光寺にあります。

証人 = 大名などのあいだで、人質として相手側に引き渡された者



正保 2 年(1645)3 月 26 日

紙本墨書・縦紙

えきんさいどう いせいえきん  
慧金西堂(惟精恵金) 宛

春光寺所蔵

こうじょう  
公帖とは、将軍から出されるぜんしゅうじいん  
禅宗寺院住職任命の辞令のことです。本状は、いえみつ  
徳川家光が  
えきんさいどう いせいえきん  
慧金西堂(惟精恵金)に出したもので、けんちやうじ かまくらござん じゅうしよく  
建長寺(鎌倉五山)の住職に任命すると記されてい  
ます。えきんさいどう  
慧金西堂は、春光寺の前身であるしゆんこういん  
春光院(現熊本市東子飼町)を開いた人です。本状で  
えきんさいどう けんちやうじじゅうしよく  
慧金西堂は建長寺住職に任命されますが、実際にけんちやうじ  
建長寺に住むことはありませんでした。春  
光院住職であったえきんさいどう  
慧金西堂には、けんちやうじじゅうしよく りんざいしゅう  
建長寺住職という臨濟宗で2番目に高い位(1番はなんぜんじ  
南禅寺  
じゅうしよく  
住職)が与えられたのでした。



天和2年(1682)9月15日

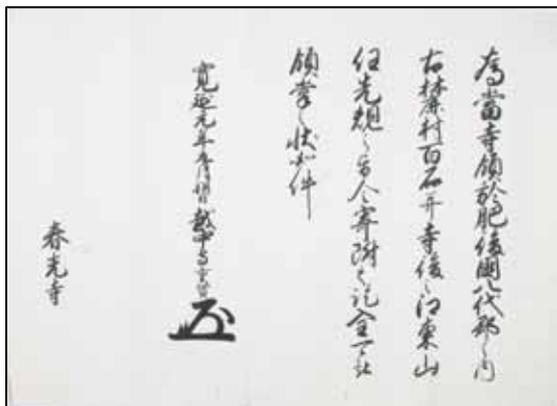
紙本墨書・豎紙

正巖和尚 宛  
せいがんおしろう

春光寺所蔵

5代将軍徳川綱吉が、春光寺住職正巖光端に宛てたもので、南禅寺住職に任命すると記されています。南禅寺住職は、江戸時代の臨濟宗のなかで最高の位にありました。

南禅寺は京都市にある臨濟宗南禅寺派の本山です。室町時代、禅宗界最上位と位置づけられますが、戦国期には衰退します。これを復興したのが玄圃霊三で、松井康之の叔父にあたります。南禅寺と松井家は、古くからこのような縁があったのでした。

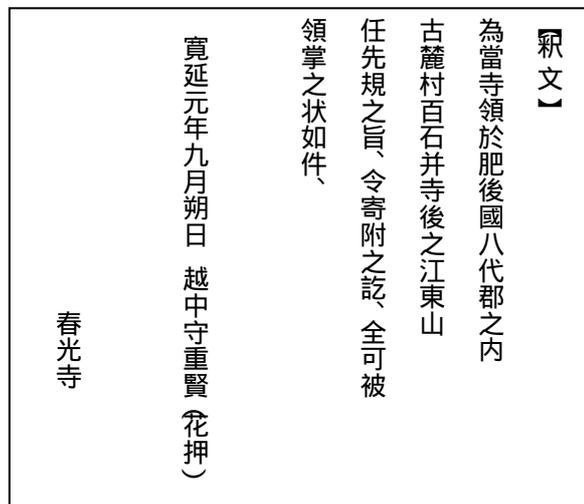


寛延元年(1748)九月朔日

紙本墨書・豎紙

春光寺 宛

春光寺所蔵



肥後熊本藩主細川重賢が春光寺に与えた寄進状です。八代郡古麓村の内 100石分の領地と春光寺の裏山(江東山)を寄付すると記されています。このように春光寺は、歴代の藩主から領地の寄進を受けていました。肥後国でこれほどの領地を寄進された寺は、加藤家や細川家の菩提寺を除くとわずかしかありません。



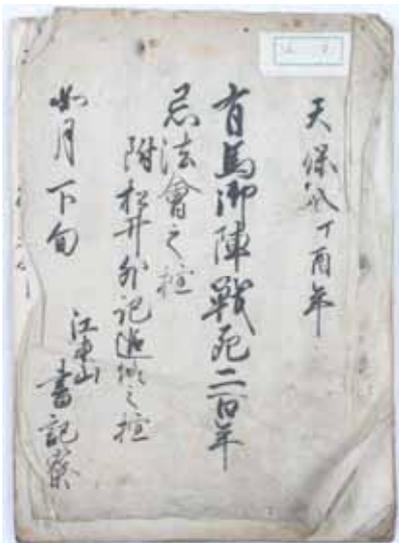
慶長 17 年(1612)

絹本着色・掛幅装

いしんすうでん  
以心崇伝(南禅寺 270 世) 賛

春光寺所蔵

松井康之の家臣、松井志摩守盛永(田中理右衛門)の肖像画です。明智光秀の家来だった盛永は、光秀の死後、康之に召し出されました。以来 30 年間康之に仕え、たいへんかわいがられました。慶長 16 年(1611)康之が病気になる、<sup>じゆんし</sup> 殉死(主君の後を追いつめこと)を願ひ出で許可されました。翌年に康之が亡くなると、その日のうちに殉死しました。殉死したのは盛永だけで、康之の子興長は盛永の忠節に感心し、<sup>えし</sup> 絵師に命じてこの肖像画を描かせました。



紙本墨書・縦帳

天保 8 年(1837)

春光寺所蔵

「有馬御陣」とは、寛永 14 年(1637)に勃発した天草・島原の乱のことです。熊本藩家老松井興長は、藩主細川忠利の命を受け、乱平定のため天草と島原に出兵しました。この戦いで、番頭松井外記をはじめとする松井家臣 8 名が亡くなりました。

天保 8 年(1837)、戦死した家臣 8 名の 200 回忌の法要が春光寺でおこなわれました。この資料は、そのときの記録です。

この展示は、学芸員実習の一環として行いました。毎年 8 月になると、大学生が実習を受けるため博物館にやってきます。学芸員の資格を取るためには、一定期間の実習を受けることが必要です。今年 は 5 名の実習生が、八代市立博物館で実習を受けました。実習期間の 6 日間を使って、展示企画を考え、作品の解説文を作りました。この解説シートの原稿は、実習生が作文したものです。